
魔法少女リリカルなのは～地球の魔法使い対時空管理局～

ロンメル元帥とリインフォース?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜地球の魔法使い対時空管理局〜

【Nコード】

N9317U

【作者名】

ロンメル元帥とリインフォース？

【あらすじ】

第97管理外世界地球にある2つの島国、イギリスと日本には魔法文化が存在していた。両者は数千年の間世間から魔法を秘匿し続け、互いに干渉を貫いてきた。そんななか日本の海鳴市でとんでもない事件が発生する。時空管理局と名乗る魔法武装組織・ロストロギア・異世界。彼らはどうするのか？

※独自設定ありと断っているのに、感想で独自設定を批判されても困ります。キャラ観、世界観が壊れるのがいやな人は読まないで下さい。というか二次創作などは作品毎に割りきって読んだ方が良いでしょう。

と思いますよ。因みに自分はアンチも非アンチも楽しく読んでます。

8・26 アンチ嫌いで独自設定につっこんできた方の感想を一件削除したのですが間違えてもう一件別の方が書かれた感想も削除してしまいました。申し訳ありません。

9・6 これから受験に集中するのでかなりペース落ちます。

来年3月まで更新が数回有るかどうか、もしかしたら無いかもしれません。

でも受験終わったら必ず再開するのでどうぞご心配なく。

だから、お気に入りから抹消しないでください！お願いします。

地球魔法協会誕生（前書き）

注意

この物語はなのは・ネギま。るろ剣・ハヤテの世界観・設定を混ぜあわせた上に独自解釈・独自設定を使用しています。

地球魔法協会誕生

2004年12月30日 第97管理外世界地球 日本国京都府嵐山

年の瀬迫る師走末、桓武の御代から明治の東京遷都まで日本の本の国の都であった古都京都、その京都でもかなりの老舗の部類に入ると嵐山のとある料亭を貸し切り密談をする人々の姿があった。

今この料亭にいるのは女将ら従業員を除けばこの者たちだけであった。

細雪が降る中、料亭の庭園の鹿威しがポーンと鳴る。暫くの静寂の後、また水が竹筒の中貯まりその重みで竹筒が下に傾き、中の水を吐き出す。そして元の位置に戻る竹筒が石にぶつかりぽーんという音がまた鳴る。

「皆、揃ったようじゃな。では始めるとしよう」

上座に座っている後頭部が異様に長い老人が呟く。この老人の名は近衛このえ近右衛門このえもん。代々摂政・関白を務めてきた五摂家が一つ近衛家の当主である。

また、近衛家は現在日本の全陰陽師及び全魔法使いを指揮する立場にある日本魔法協会の長を担当する家柄である。近右衛門が側に控えている進行役の少女桜咲刹那に目で合図を送ると刹那は無言で頷き立ち上がる。

「皆さん今日はお忙しい中お集まり頂きありがとうございます。私は今回の会議の進行役を仰せつかっております桜咲刹那と申します。

よろしく願います。

それでは早速本題に入らせていただきます。お手元の資料をご覧ください。」

刹那が各人に見るよう促した資料の表紙にこう書かれていた。“時空管理局の脅威及びその脅威に対する対策綱領”

刹那はそのまま話し続ける。

「事の始まりは今年の5月、当時神奈川県海鳴市に旅行中だった私が現地にて不可思議な魔力反応を感知。

反応があった地点に向かったところ今まで確認されていない未知の術式の魔法で戦闘をしている金髪の少女と栗毛の少女及びその使い魔と思われるフェレットを発見。

尚、両者はおそらく膨大な魔力を放つ宝石をめぐって争っていた模様。

私は、近衛家と連絡をとりしばらく様子見をした後接触を試みることにし約3週間ほど海鳴市に滞在し彼女らの身边と先ほど申し上げました宝石について調査を行いました。

その間に先程の少女たちによる戦闘が数回発生しました。

そして判明したことは次の4点です。

一つ、当初栗毛の少女の使い魔と思われていたフェレットはフェレットに擬態した異世界の出身の人間であり名はユーノ・スクライアといい、彼の発掘したジュエルシードと呼ばれる先ほどお話ししました膨大な魔力を内包した宝石を回収するために地球にやってきたこと。

そしてそのジュエルシードはただの魔法の宝石ではなく制御が困難であり暴走の危険をはらんだ大変危ないものであるということ

一つ、しかし彼は回収作業中に負傷したため、偶然遭遇した民間人

で魔力資質の高い栗毛の少女に回収作業を依頼したこと。

一つ、栗毛の少女の名は高町なのは、海鳴市在住の一般人であり非常に高い魔力資質を持っていること。

一つ、金髪の少女の名はフェイト・テストロッサ。動機は不明だがジュエルシードを回収していること。以上の4点です。」

刹那がいい終わるや否や、にわかに室内がざわめく。

「異世界ですか。驚きですね。」

冷静な口調で近衛家の遠縁にあたる遠坂凜が反応する。

彼女の左右には遠坂家の居候である衛宮士郎とセイバーが座っている。

その衛宮士郎とセイバーは他のものと比べるとかなり落ち着いていた。

それもそのはず衛宮士郎は元々は一般人であっただけに魔法の存在を知ったとき時やそれを身につけていく過程で非日常に対する抗体が出来ていたのだ。

また、セイバーが周りとは比べて落ちついていられる理由は、彼女の人生経験が半分と先刻からこの京都一の老舗料亭の料理の方にばかりに集中しているのがもう半分の理由であった。

「で近衛殿。この事が冊子にある時空管理局なる組織とどう関係があるんだ？」

冊子を手の甲で軽く叩きながら真祖の吸血鬼エヴァンジェリンA・

K・マクダウエルと飛天御剣流継承者比古清十郎がいう。

比古の隣には彼の唯一の弟子である赤毛の長髪の少年 緋村剣心が座っている。

ちなみに比古清十郎はかなりの酒豪でもある。今現在すでに一升近く飲んでいるが全く酩酊している様子がない。

「比古殿。この話にはまだ続きがあります。」

進行役の刹那が近右衛門の代わりに落ち着いた口調で比古の疑問に答える。

「先程の4点が分かった時点で我々近衛家は高町なのはに協力しようとは接触を試みました。

才能があるとはいえ民間人の少女には苦重すぎると。

しかし、接触しようとした矢先思わぬイレギュラーが発生したのです。突如、時空管理局と名乗る武装組織が現れたのです。

彼らのことは先の調査の段階で臆気ながらその存在はつかめていました。この地球以外の数多の異世界管理している武装組織。

しかし、彼らの実態が判然とは分からないので詳細を掴むまで接触はしない方針でした。

彼らが来ないうちに異世界人であるユーノ・スクライアに協力し我々については口外しないよう求めるつもりだったのです。」

刹那は一呼吸おいて又話し始める。

「我々近衛は事の重大さを認識し、三千院家と鷲ノ宮家と地球で日本以外に唯一魔法が存在し生き残っているイギリスのウェールズの魔法使いたちに協力を要請しました。

我々は今までウェールズの者たちとは、多少の魔法技術の交流や人材交流があったものの基本的に互いに不干渉、双方とも魔法の秘匿

に努めるという合意しか立てておりませんでした。

それに、数年前にエヴァンジェリンやアーカードを日本に匿っている事がバレて以来微妙な関係が続いていました。

しかし、時空管理局なるこの世界外の武装組織が確認された以上我々地球の脅威たるか否か、いやそれ以前の問題として実態を掴んで置かなければ地球の安全を害する恐れがあると彼らを説得し協力を得ることに成功しました。

また、近い将来ウェールズ魔法協会と日本魔法協会を統合して地球魔法協会を設立することも合意しました。

三千院家と鷺ノ宮家もスポンサーになっていただけるとの事です。これが今年の6月のことです。

そして今月我々とウェールズ魔法協会の調査に一定の目処が付いたのでそれを皆さんにお知らせし、日本魔法協会としての方針を決めるために皆さんをおよびしたわけです。」

「まあ、すでに近衛家や三千院家、鷺ノ宮家はすでに行動を開始しておる。儂としては、日本魔法協会もそれに連携して動いて欲しいのじゃが……。すまん。事後報告ばかりで皆には始めから事後承諾を求めるだけになってしまつて。」

近衛近右衛門がすまなそうな顔をして一同見ながらそう言う。

「心にも無いことを言うなジジィ。従ってやるから早くその時空管理局とやらの調査結果を教えろ。」

なんとも傲慢な態度で近右衛門に狼のような鋭い目付きの少年が言う。

「口を慎め斉藤！！ 貴様それでも神鳴流の門下生か！」

刹那が斉藤を睨んで怒気を効かせながら言う。

「フンッ。 青山の家には厄介になってはいるが神鳴流の門下になった覚えはない。いいからさっさと結果を教えろ。」

斉藤は悪びれる様子もなく平然として言う。

「クッ。 調査の結果を報告します。」

？世界は我々が住んでいる世界以外にも無数の世界がありそれらを管理維持する為に設立された組織それが時空管理局です。管理局は警察と軍隊と裁判所を統合した組織であり絶大な権力を持っています。

しかし、管理の対象となるのは次元間航行技術を持ち他の世界を観測しうる世界のみです。

そのため地球は管理外世界とされ基本的な干渉とされています。

また管理局は科学兵器をはじめとする質量兵器の廃止を掲げ魔法のみを武力として用いによって次元世界管理維持を行っています。そして、魔法戦力も管理局によって掌握されており、管理世界においては武力を独占しています。

？管理局は先天的な資質に依存する魔法に頼っているのと膨大な数の管理世界を抱えているため慢性的な人手不足に陥っています。

そのため管理世界・管理外世界で魔法の才能がある者なら子どもだろうと管理局にスカウトしています。例の海鳴市の高町なのもスカウトされたようで今現在管理局で働いています。しかも前線で。

？管理局の主な活動内容は犯罪者の逮捕、ロストログアの確保です。ロストログアと言うのは我々の世界以外の世界で高度に科学や魔法が発達しながらもそれが仇となって滅びてしまった世界の遺物の総

称です。

使い方次第では世界そのものを消滅させかねないものも数多くあるようです。海鳴市の事件のものであるジュエルシードもかなり危険なロストロギアだったようです。

？管理局の内部決して一枚岩ではなく、「自分たちの考える正義のためであれば犠牲もやむなし」という国粹主義的な極右思考を持つ者が末端部のみならず、上層部にもいるようです。

つまり、完全に統制のとれた組織ではなく戦前の大日本帝国陸軍の関東軍のように上層部の意向を無視し、一方的に暴走しかねない危険性ははらんでいます。

そして以上の点を踏まえ、我々地球人類は早急に時空管理局に対抗しうる魔法組織を立ち上げ、地球世界の安全のため地球に流れ着いたロストロギアの確保・封印や我々の自存・独立を守るため地球魔法文明のロストロギア級の産物の確保・秘匿が急務であるというのがウェールズ魔法協会と我々近衛家の合意です。皆さんにはそれを認めていただきたい。

これ以上地球の子供たちは戦場に送り出させないために、そしてなにより管理局がロストロギアを建前に地球世界や我々地球の魔法使いに対して不当に干渉してきた時のために、その時のために我々はまとまらなければならない。

お集まりの皆様どうかご理解のほどよろしく願います。何か何かのある方はいらっしゃいますか？」

一同「・・・・・・・・・・・・・・・・」

異議を唱える者は誰もなく、再び鹿威しの音だけが一定の間隔で響き続ける。区切られた静寂が暫く続いた後刹那が口を開いた。

「聡明なご理解誠にありがとうございます。それでは本日はこれにて解散とします。」

地球魔法協会誕生（後書き）

刹那「長。どうしてこんなに早く時空管理局のことを調べ上げられたのですか？」

近右衛門「なあに、奴らが才能あるものをスカウトするのを利用してウェールズと共同でスパイを送り込んだり、世界有数の財閥である三千院を通して政府に働きかけて国家の力を使って海鳴市の事件の關係者を調べ上げたんじゃないよ。電話盗聴・プロバイダーを抱き込んだのハッキング・盗聴器etc・・。今のところ管理局は地球には魔法文明がないと思っっているようじゃ。また管理局と魔法の存在を知っている地球人類は我々地球魔法協会の人間だけじゃ。」

地球魔法協会正式発足（前書き）

修正しました。

やっぱり、パソコンからがやり易いです。

そして、グーグル日本語入力って意外とダメだね。

地球魔法協会正式発足

6月に近衛家が三千院家と鷲ノ宮家から協力を取り付けてからの近衛家の行動は早かった。

まず7月に学校法人聖祥学園を買収し麻帆良学園と改称し9月の新学期に合わせて、近衛近右衛門が麻帆良学校法人理事長と麻帆良大学総長に就任した。

また時を同じくして初等部の校長には近衛詠春が就任し、初等部・中等部・高等部・大学の教職陣にはそれぞれ日本魔法協会とウェールズ魔法協会から魔法先生と魔法生徒が派遣された。

特に優秀な魔法使い達は大学の工学部や理学部の研究室に世界中からヘッドハンティングした優秀な学者達と共に送り込まれた。

目的は魔法技術と科学技術の融合による次元航行技術と次元航行船の開発である。

魔法主体で社会が発達し、地球世界より魔法を大規模に研究・運用してきた管理局側にやはり純粋な魔法技術では一日の長がある。そう判断したのだ。

また学者達のうちの大多数を占める非魔法関係者達と学園全体には、魔法の秘匿のため認識阻害魔法がかけられた。

学者達は魔法技術を疑問に思わず認識し、また自分が扱っている技術がノーベル賞ものだとしても凄さ事態を認識出来ず世界に発表しようとも思わないし、学園外に出たり、外部の人間と接触している間は研究内容を認識出来なくなるがそれを異常とも認識出来なくなるのだ。

こうした一連の施策に続いて、近衛近右衛門総長は更に大学設備の増強と地球魔法協会の設立に向けて動き出した。

真帆良大学工学部・理学部の新キャンパスを海鳴市内に増設し、広大な実験設備・研究設備を起工しキャンパスの奥の地下には地球魔法協会設立を見越して次元航行船用ドッグを含む巨大な地下施設の

建設を開始したのである。来年の新年度に完成予定である。

それから月日は流れて……

2005年 1月26日 京都 近衛邸

年末の会議から約1ヶ月が経った今日、京都にある近衛邸では地球魔法協会発足式が開かれていた。

ちなみに旧日本魔法協会側からの出席者は近衛近右衛門を筆頭に近衛詠春、遠坂凜、衛宮士郎、セイバー、桜咲刹那、比古清十郎、緋村剣心、斉藤一、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、アーカード、逆鬼至緒、瀬田宗治郎、そして地球魔法協会のスポンサーである三千院ナギ、その執事綾崎ハヤテ、もう一人のスポンサーである鷺ノ宮伊澄。

一方、旧ウェールズ魔法協会側からはメルディアナ魔法学校長でもあり、旧ウェールズ魔法協会の会長を務めていたデビッド・ロイド・ジョージ、ナギ・スプリングフィールド、アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクト、クルト・ゲーデル、タカミチ、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、アリカ・スプリングフィールド、ネギ・スプリングフィールド。

上座にロイドと近右衛門が座りそれ以外は旧団体ごとに左右に別れて座っている。

「「それでは、今日を以て地球魔法協会を発足する。尚、本部は日本国神奈川県海鳴市麻帆良学園大学工学部・理学部キャンパス内に

置くものとする。」

ロイド・近右衛門の宣言に続いて刹那が発言する。

「役職についてですが、地球魔法協会の会長はデビッド・ロイド・ジョージ殿、その補佐にクルト・ゲードル殿、副会長には近衛近右衛門殿、その補佐に近衛詠春殿と致します。」

デビッド・ロイド・ジョージはタカ派の人物（管理局に対して強い敵愾心を持っている。今は早急に協会が力を蓄える必要があると主張している。）が日本が匿っていた吸血鬼二人については昔から穏健な考えの持ち主である。そもそも今となっては管理局に対抗するため少しでも戦力がほしい時であるから、吸血鬼だからどうだと言義を唱える人物は少数派である。

「では、この後は協会内の結束を図るための懇談会・食事会と致します。」

・ ・ ・ ・ ・

「シロウ、凜、この鰐という魚とても美味しいですよ。」

「セイバー、食べてばかりじゃなくて少しはウェールズの人と話し

したらどう」

食事ばかりに集中しているセイバーに凜が苦言を呈する。

「遠坂の嬢ちゃん！いいじゃねえか。今日はめでたい日なんだからよ！」

一升瓶に入った日本酒をラッパ飲みしている空手の達人・喧嘩百段と謳われる逆鬼至緒が言う。

そんなやり取りをする彼らを遠くから見つめる人物がいた。

「あのセイバーとか言うやつスゲー魔力だぜ。それにあのイカツイおっちゃんもスゲー気の量だ。しかも、伝説の吸血鬼の二人もいるし面白くなってきやがった」

「ナギに以上のバグキャラがこうもいるとは・・・ここはチートのバーゲンセールですか・・・。しかし、一癖も二癖もありそうな人たちがかりで実に興味深いです。彼らの人生是非記録願いたいものですね。」

アルビレオはニヤニヤした不敵な笑みを浮かべながら、ナギに語りかける。

「同感じゃの」アルビレオの“チートのバーゲンセール”という言葉葉にゼクトが同意する。

そして、ナギがまた口を開く。

「よし、アイツらにあとで模擬戦を申し込むぞ！」

「ホントに貴方という人は好戦的というか、バトルマニアというか、もう所帯も持ったんですから少しは大人しくしたらどうですか。」

「いいんだよアル！ 俺が大人しくなったらネギがもっと真面目な堅物になっちまうぜ。」

一方、クルトは「日本に来たからには是非高名な日本の剣術を収めたいものです。来るべき奴らとの戦いのためにも……。まあ、私には会長の補佐の仕事もありますが。」と小さな声で呟く。

そんなクルトに意中の人物が話しかけてきた。

「やあ、クルト君。私が副会長補佐の近衛詠春だ。よろしく頼むよ。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。Mr. 近衛」

「詠春で構わないよ。これからは仲間なんだよ。」“地球世界を守るね”と詠春は語尾に付け足す。

「では、詠春さん。一つお願いがあるのですが。」

「なんだい？クルト君？」

「私に神鳴流剣術を是非ご教授願いたいのです。私は今、力を欲し

ています。時空管理局と戦うための力を。」

詠春の顔が険しくなる。

「クルト君、君もロイド会長のようにタカ派なのかい？」

「僕は……、僕も会長も戦争狂ではありません。戦うべき時には戦うべきだと考えているだけです。守るために！地球世界を守るために！」

詠春は10秒ほど難しい顔をして考えた後に言った。

「そうか……。いいだろう。今のところ神鳴流の道場は京都にしか無いが、海鳴市にも道場を近々作る予定だ。私や刹那が指導しよう。」

「ありがとうございます。」

クルトは詠春に深々と頭を下げる。

他のメンバーはお互いに相手がどのような人物か探るような会話をしていた。そんな感じで、懇談会は終わった。

地球魔法協会正式発足（後書き）

デビッド・ロイド・ジョージはウェールズ出身の政治家の名前から取りました。あと、この世界には魔法世界が無い設定でいこうと思っ
っているラカンなどの人間じゃないキャラは出ませんでした。逆
鬼至緒はラカンの代わりです。もし、魔法世界も出したほうがいい
という方は感想に書いてください。そっちの構想もあつたんですが、
完全なる世界とかメガロとかゴチャゴチャしすぎてよくないかなと
思っています。

キャラ設定・その他設定（前書き）

この世界には紅き翼は結成されていませんが、原作での魔法世界出身者はウェールズ出身としていますので詠春以外のメンバーはウェールズ魔法協会に所属していたので交友があったことにしています。ナギとアルはパートナー、ナギとゼクトは師弟関係、タカミチとクルトも原作通り孤児であり、クルトはロイド会長に引き取られ育てられた、ガトウとタカミチは師弟関係。

キャラ設定・その他設定

キャラクター設定

年齢は地球魔法協会発足時（2005年）の物

？近衛 近右衛門 （70歳）

学校法人麻帆良学園の理事長であり麻帆良学園大學の総長でもあり地球魔法協会の副会長でもあるぬらりひょんのようなじい。

？近衛 詠春 （30歳）

原作と同じく、木乃香 （10歳）が生まれたときに妻を亡くす。

？デビッド・ロイド・ジョージ （60歳）

旧ウェールズ魔法協会の会長であり、地球魔法協会の会長。元英国海軍大佐。フォークランド紛争にも参加した。艦長経験もある。1990年45歳の時に死去した父の跡を継ぎ、魔法協会会長職に就くために退役。

？遠坂 凜 （17歳）

地球魔法協会設立を受けて麻帆良学園高等部に転入。近衛家の遠縁でもある。地球魔法協会は三千院家・鷲ノ宮家の援助を受け潤沢な資金があるので、宝石の購入資金には困っていないがやはり金にシビアである。

？衛宮 士郎 （17歳）

孤児である（火災には遭ってない）切嗣に引き取られ、切嗣が死んだ後は遠坂家の世話になってる。遠坂凜の幼馴染みであり、凜がうっかり魔法の存在を士郎にバラしてしまったあと、凜に頼み込んで魔法を教えてもらった。セイバーは士郎がよくわからない晶霊術を試してサーヴァントとして呼び出してしまった。

？セイバー

士郎のサーヴァント。性格は良く言えば実直で生真面目だが、悪く言えば融通の利かない頑固、そして負けず嫌い。凜とした表情を滅多に崩さないが、怒ると怖い。その一方で時折、年相応の少女らしさを見せることもある。

？比古 清十郎 （35歳）

飛天御剣流の継承者。近衛家から支援を受けていたが、飛天御剣流のモットーから正式には日本魔法協会には所属していなかったが、地球魔法協会設立に際して地球魔法協会に参加している。ラカンに勝るとも劣らない気を操る。

？緋村 剣心 （17歳）

比古清十郎の弟子。平成の人間なので頬に十字傷はない。ovaの剣心を想像して欲しい。原作と違い師匠と決別したわけではないのです。すでに奥義は授けられている。気で身体強化を行うことで体を壊す事無く奥義を含めた飛天御剣流の技を使用できる。

？桜咲 刹那 （10歳）

原作通り、近衛に引き取られる。木乃香の護衛をしている。ちなみにこのかは溺れていない。

このかと刹那は新年度からなのはたちの通う麻帆良学園初等部に通う予定。

？ 斎藤 一 （17歳）

実家は道場で、剣術を学んでいたが両親と死別した後は青山家の世話になっている。大学へ進学し公安関係の職につきそのなかで自分の信念である“悪・即・斬”を貫く予定だったが時空管理局の確認と地球魔法協会の設立を受けて、協会の中で信念を実践すると決める

？ 三千院 ナギ （13歳）

世界有数の財閥である三千院財閥の当主。ケロロ軍曹の西沢グループ的存在。

原作通り、ハヤテと出会い執事として雇っている。この世界にも白皇学院はある。

？ 鷺ノ宮 伊澄 （13歳）

鷺ノ宮家の一人娘。鷺ノ宮家は陰陽師の家柄であり近衛家とも懇意にしており、それもあって今回協会を支援する事になった。鷺ノ宮家の中で一番魔法や陰陽術の素質があるため結構発言力もある。

？ 綾崎 ハヤテ （16歳）

超人的な能力を持つ三千院執事。作者はコイツだけにはギャグ補正をかけようかなと思っている。原作でもメチャクチャかかっているから。

彼らはネギま原作開始時と同じ年齢設定ということ

?ナギ・スプリングフィールド

?アルビレオ・イマ

?フィリウス・ゼクト

?クルト・ゲーデル

?タカミチ

?ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ

?アリカ・スプリングフィールド

?ネギ・スプリングフィールド(10)

新年度前 高町家との接触（前書き）

高町家との接触があります。

新年度前 高町家との接触

2005年3月15日 麻帆良学園大學工学部・理学部新キャンパス及び地球魔法協会本部施設が竣工

このころには地球魔法協会の主戦力（主に発足式に参加した面々）はそのほとんどが海鳴市に移り住んでいた。

彼らは、学園内で魔法先生・魔法生徒として活動するものと、学園内ではなく市内に拠点を構えて活動するものに分かれた。

後者は比古清十郎、緋村剣心、斎藤一、瀬田宗次郎、逆鬼至緒の5人。

彼らは高町家近くに建てた道場で日々鍛錬に励み有事に備えている。また、クルトは暇さえあればこの道場で刹那や詠春から神鳴流を習っている。

前者はナギ・ネギ・アル・ゼクト・タカミチ・ガトウ・刹那・木乃香（魔法のことは知らない）・エヴァ・士郎・凜の11人。

ナギ・アル・タカミチ・ガトウは学園内で教師・研究協力。士郎と凜は高等部に在籍しながら協会員として活動している。

ネギ・エヴァ・ゼクト・木乃香・刹那は新年度から初等部4年生として編入予定。高町なのは同じクラスになる予定である。

エヴァとゼクトは新キャンパスの本部敷地内に建てられたログハウスに住んでいる。また、ナギ・アリカ・ネギ・木乃香・刹那・詠春・近右衛門は近衛家が海鳴市内に建てた別邸に住んでいる。これは膨大な魔力を持ちながら、詠春の意向で魔法の存在を教えられて

いない木乃香の安全のためでもある。

3月中旬 某日

高町家と水原公園のほぼ中間に位置する場所に武道派の協会員が日々鍛錬に励む道場があった。

敷地が築地でぐるりと囲まれており南側に、大きな的には東京大学赤門より一回り程小さい薬医門があった。

門の柱には看板が掛けられていおり、その看板にはこう書かれていた。“弘道館道場”

中からは朝の六時から木刀と木刀が打ち合う音が聞こえていたが、日はすでに西にかなり傾いている。

「今日はこれまでだ剣心。しっかり休めよ。」

飛天御剣流の継承者たる証の赤マント、その赤マントを羽織った大男比古清十郎が床でくたばっている

剣心に向かって言う。

一方、斉藤と瀬田は翠屋に向かって歩いていった。

斉藤が一通りの鍛錬を終えた後、例の高町なのはこの少女を見にこうとしたところそれに瀬田が便乗してたのだ。

「斉藤さん。例の高町なのはどういう少女に会いたいのなら何故彼女の家に行かないんですか？」

この時間ですと、学校の方は終わっているでしょうが、親の職場にいるとは限りませんよ。」

「阿呆。いきなり見ず知らずの他人が人様の家に押し掛けられる訳がなかろう。翠屋に行つてよしんば、高町なのはいなかったとしても、後々彼女と接触するためには、彼女の両親とは面識を持って

おいたほうがいい。それに」

「それに？」

瀬田が斉藤に問いかける。

斉藤は大きく息を吸って、ゆっくり吐き出し、先程より遥かに鋭い眼光を放ちながら瀬田に言い放つ。

「彼女の父親は剣術道場をやっているそうではないか。一戦交えてみるのも悪くあるまい。」

「ハハッ。斉藤さんたら、最初からそっちの方が目的だったんでしよう。」

まあ、先方も忙しいようですから、多分今日は無理でしょう。

市内でもかなりの人気店らしいですよ。

そうだ、逆鬼さんにお土産でも買って行きましようか。いやでも、逆鬼さんはお酒のほうがいいかな？でも僕未成年だからお酒買えないしな。どう思います？斉藤さん。」

瀬田は話し相手のことを忘れてマイペースに一人で喋り、そしてまた斉藤に話しかける。

「どうでもいい。阿呆。」

瀬田と言う男はひどくマイペースであり、しばしば話の腰を折ったり、脈略のない話を始めたり、会話の途中で独り言を言い始めたりする。

そんなこんなしているうちに二人は翠屋に着いた。

翠屋のドアが開かれ、カランカランとドアに付けられている鐘が鳴る。

斉藤が先に入りそれに瀬田が続く。瀬田はシャツの上から紋柄の着物に袴穿きという明治の書生のような格好をし、斉藤は黒の長袖のワイシャツに黒のズボンでシャツのボタンは第一まできっちり留められている。もともと斉藤は細身であるが、黒色によって更に引き締まってスマートに見える。

「「いらっしやいませー。」」

とカウンターにいる高町士郎と高町桃子が二人に声をかける。

店内には学校帰りの思われる女子学生が数組、それになんと、二人が協会からの情報で確認し、先ほど話題にあげていた少女、高町なのはとその友人アリサ・バニングスと月村すずかがいたのだ。

内心ほくそ笑む斉藤に瀬田がそっと「ツイてますね。」と耳打ちする。

二人を席に案内するためにカウンターを出てきた高町士郎が二人に「二名様ですね。」と確認する。

「ええ」と瀬田が答え、二人は案内された席に座った。コーヒーを二つ注文し、カウンターに戻ろうとする高町士郎に二人は声をかける。

「あのー、マスターさんは剣術を嗜むのですか？」

瀬田が問う。

「ええ。 どうして分かったんですか？」

若干、怪訝な顔をして高町士郎は瀬田にそう問うた。

「竹刀ですよ。 あなたの手の。」

高町士郎の手を指さしながらそう答えたのは士郎に尋ねられた瀬田ではなく斉藤だった。

「私達は、水原公園の近くに新しくできた剣術道場の者ものでして、まあ道場と言っても一般の道場のように生徒さん募集して商売でやっている訳では無いのですが。」

それより、マスターさんなかなかの使い手とお見受けしました。是非お名前をお聞かせ願いたいものです。」

協会からの情報で知っているが初対面なので斉藤は名を尋ねた。

「そうですか。 あなた方があの新しくできた道場の方達だったんですか。」

私は高町士郎です。この喫茶店だけでなく、貴方がたの道場の近くの自宅内にある剣術道場で師範をやっております。貴方がたのお名前もお聞かせ願えますか？」

「私は斎藤一です。こっちが「瀬田宗次郎です。」よろしく願います。高町士郎さん。」

今度、機会があったら是非、試合したいものです。」

「ええ。では何時か試合しましょう。私の息子も貴方がたと同じぐらいの年だね、息子の方とも是非。」

そう言って土郎はカウンターの方に戻っていった。

新年度前 高町家との接触（後書き）

協会の人間や木乃香は海鳴市に乗り込んでくるにあたって魔力の隠蔽を行っています。

新年度・進級・編入（前書き）

あとで加筆しました。

新年度・進級・編入

今日から新学年、四年生になった高町なのは、近衛詠春新校長の長い長い有難いお話に何とか耐え、講堂から教室へ戻っているところであつた。

「今年も、同じクラスになれてよかったね。アリサちゃん。すずかちゃん。」

「そうね。」

「私も、本当によかったよ。知らない人ばかりと同じクラスならどうしようかと思つてたよ。」

一緒に教室に向かつて歩いている、なのはの友人であるアリサ・バニングスと月村すずかがそれぞれ答える。

「それより、どの先生が担任なのかしら。」

「今日から、初等部に麻帆良大学から赴任してきた先生が担任らしいよ。アリサちゃん。」

アリサの疑問になのはがそう答える。

「やさしい先生だといいな。」

すずかが思案顔でそう言う。

そんなやり取りをしているうちに、三人は教室に着た。しばらくすると、他のクラスメートも皆教室に着き席についた。

しかし、担任の先生は一向に來ない。それをいいことに、なのは達を含めたクラス全員がチャイムがすでに鳴っているにも係わらずしゃべっている。

それから十分後・・・

唐突に教室の戸が開かれ、先生と思われる男性が入ってきた。髪は首もとぐらいまで伸びた赤毛であり、身長は高く、全体的にスマートであるが、それでいて決して華奢ではなく、綺麗に締まった筋肉を衣の下からでも感じさせる体格である。格好は、黒のジーンズにゆったりした黒の半袖Tシャツ、首からは金属製の地味なペンダントを引っさげている。

教壇に上がったその男は自己紹介を始めた。

「俺がお前らの担任、ナギ・スプリングフィールドだ。よろしく頼む。なにか質問はあるか？」

モブキャラ達が当たり障りのない質問を次々としていき、ナギはそれに逐一答えていく。質問タイムが一段落したところでナギが忘れていた事を思い出しその内容を皆に告げた。

「そうだ、すっかり忘れるところだった。みんな、今日からこのクラスに転校生がくるぞ。」

ナギの言葉を受けて教室中が俄かにざわめきたつ。

「先生！その転校生って男の子？女の子？」

「どんな感じですか？」

「かっこいい男の子がいいな。」

「女の子がいいな。」

「はいはい、静かにしろー。」そう注意しながらナギは内心やっぱ

俺には、教師なんて性に合わねーなと思っていたりした。

「転校生は5人。男子も女子も両方いるから心配するな。それじゃ入ってこい。」

ナギの合図によってエヴァンジェリン・このか・刹那・ネギ・ゼクトが教室に入ってきて来て順に自己紹介を始める。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。よろしく頼む。」

「近衛木乃香います。京都から来ました。みんなよろしゅうな。」

「桜咲刹那です。よろしくお願いします。」

「ネギ・スプリングフィールドと申します。皆さんよろしくお願いします。」

「フィリウス・ゼクトじゃ。ゼクトと呼んでくれ。よろしく頼むのう。」

男子達は「（よっしゃああああ！！！！）・（か、可愛すぎる・・・）・（我が世の春が来たああああ！！！！）」などと心のなかで思った。

一方、女子たちも「（外国のひとつでカッコイイ・・・）・（ゼクトくんはクール系、ネギ君はカワイイ系だなあー）」などと心のなかで思った。

「じゃ、お前ら適当に空いている席に座れ。」だんだんとナギの口調が荒くなる、というか、地にもどってきいるだけである。

木乃香と刹那は隣り合って座り、ネギはなのはの隣、エヴァはすず

かの隣、ゼクトはアリサの隣りに座った。

「私は高町なのはって言うの。よろしくなの。ネギ君。」

「ハ、ハイ。こちらこそよろしくお願いします。」

「私はアリサ・バニングス。ところでアンタ、なんでそんなジジくさい喋り方なのよ。」

「日本語を覚える時にこの喋り方が気に入ったんじゃない。気に入るでない。」

ネギとなのは、ゼクトとアリサは隣同士でそれぞれ話している中、エヴァは席に着くなり眠ってしまった。

そして、お昼休み。

「ネギくん・ゼクトくん私たちと一緒に弁当だべない？」
となのは達が誘ってきた。

ネギやゼクトは他の女子からも声をかけられたが、やんわりと断った。

“高町なのは。今のところ普通だけど、どんな人間かはつきり見定めなきゃ。”とネギは考えていた。

さすがが寝ていたエヴァを起こしてエヴァも一緒に食べることになった。

屋上

「エヴァンジェリンさんはどこから来たの？」

お昼休みまでずっとエヴァが寝ていたのいろいろな聞きたくても聞けなかったさすが弁当を食べながらエヴァに聞く。

「エヴァでいいぞ。すずか。後お前らも。それと、質問の答えだが、私は、近衛や桜咲とおなじ京都から来たんだよ。昔からずっとそこに住んでいた。」

「へえ。それでエヴァちゃん日本語上手なんだね。」

「こんなの一週間もあれば充分だろ。」

「そうですね。」「そうじゃな。」「そうなんだあ。」

「そんなワケないでしょ！そこ、なんで納得してるのよ！」

冷静に突っ込むアリサを無視してゼクトが話題を変える。

「そんな事より。なのはよ。お主の家はなかなか評判の喫茶店をやっているそうじゃな。今度行ってみてもいいかの？」

「全然構わないよ。というか今日来たらいいと思うの。ゼクトくんだけじゃなくてネギくんも。新しい友だちが来てくれたらお父さんもお母さんも喜んでくれるの。」

「え、いいんですか？お邪魔しても。」

「大丈夫なの。すずかちゃんとアリサちゃんも来るよね？」

・ ・ ・

そんなこんなで放課後、五人は翠屋でケーキをご馳走になっているのであった。

「お、おいしいですよ！このケーキ、それにこの紅茶も。イギリスでもこんなに美味しいの飲んだことありません。」「そうじゃの〜。」
「同感だな。まあ私は、日本茶や和菓子の方が好きだな。」

「作った方としてもこんなに喜んでもらえるなんて嬉しいわ。それにしても、なのはが、新しい友だちを連れてくるなんて嬉しいわ。しかもこんなにカッコイイ男の子を二人も。ねえ、士郎さん。」

「二人ともなのは渡さんぞ！」士郎が眼光を放ちながらいう。

「「はははは。滅相もない（です）。」」

「二人とも、士郎さんのことは気にしないでね。なのはと仲良くしてあげてね。」そう言って桃子は士郎を引きずって厨房へ戻っていった。

それからまた、五人で話し始める。

「そういえば、朝から気になってたんだけど。ネギ。アンタ、ナギ先生と親子なの？苗字一緒だし、顔も似てるし。」

「そうですよ。お父さんは僕のがれの人です。小さい頃は忙しくてあんまり一緒にいてもらえなかったけど、今はこうして学校で

も、家でも会えるからとても嬉しいんです。」
ネギは笑いながら言う。

「「「そうなんだ・・・。」」」なのは・アリサ・すずかはバツの悪そうな顔をする。

似たような経験を持つ人にはネギの気持ちが痛いほどよく分かった。

「だから、僕今がすごく楽しいんです。

今は父さんとも母さんとも前より一緒にいられる。

それに、いままでイギリスの山奥の田舎にいたんですけど、同じ年の人がほとんどいなくて友達も少なかったんです。だから今がすごく楽しいんです。皆さんとこうしてお友達になれて。

だから、これからもよろしくお願いしますね皆さん。」

「「「こちらこそ。よろしくね（なの）。ネギ（くん）」」」

そして、なのはが新しく話をきりだす。

「ねえ、ネギくん、それにみんな、私の友達で今はすごく遠いところに行ってしまった子がいるんだけど、もしいつかその子が海鳴に來たらその子とお友達になってくれないかな？

フェイトちゃんって言うんだけどとってもやしくて可愛い子なんだよ。」

そのなのはお願いにネギ達が肯定の返事で返した。また、やや素っ気ないものであったがエヴァも同じように返事を返した。

かつての孤独な一匹狼であった頃のエヴァにとってはこの種の雰囲気や馴れ合いは虫酸が走るほど嫌いで、そこには嫉妬の気持ちもあった。

しかし、エヴァは日本の協会に匿われてからはおよそ孤独とは無縁の生活を遅れていた。

日本の協会の者たちの中で自分が吸血鬼というだけで頭ごなしに否定するものは誰一人としていなかった。

それどころか、遠坂の者たち、特に衛宮士郎は快く迎え入れてくれた。

加えて、日本の協会の人間たちは一癖も二癖もあるとても面白い奴らばかりであった。

人間の身でありながら自分に勝るとも劣らない猛者達、自分より遙かに長い時を生きている不敗で無敵で馬鹿馬鹿しい吸血鬼、実はアーサー王であった大食い娘、茶々丸という心を持った新しい従者、他にもいろいろなことに驚かされた。

それと同時に、この寛大で穏やかな風土を持つ日本やその文化がだんだんと好きになっていった。

京都にいた頃は、神社仏閣史跡を巡りをしたり、梅・桜・雨・蝉・紅葉・月・雪・等々を愛でて四季を楽しみ、日本の古典を読みあさり、和歌を詠んだりして王朝文化に浸ったりしていた。

そんなこんで、今のエヴァは自分でも吃驚するぐらいに丸くなっていた。

「そいつが来たら教えろ。話し相手ぐらいにはなってやるよ。」

全員の快諾を得て、なのはは満面の笑みを浮かべてこう言った

「ありがとう。みんな。」

その日の夜 近衛邸

「ネギ、エヴァ、ゼクト、例の高町なのはどんなやつだった。」

「ハイ、とてもいい人でした。父さん。とても、悪い人には見えません。」

「ワシもじゃ。」

「私も同感だな。無垢で優しい目をしていたが、悲しさというのも分かっている目をしていた。あの歳でまあ、よくもあんな目ができるものだな。おそらくは5月の事件でなにかあったのだろう。奴が友達なってほしいと言っていたフェイトとか言う奴は、5月の事件の際、高町なのはと交戦していた奴なのだろう。」

「ああ、事件の顛末はまだわからないが、和解したようだな。だが、遠いところに行ってしまったというのは管理局が身柄を抑えたということなのか？まあ、それは置いておくとして、高町に関してだが、俺も教室で見えてそう感じたよ。いい目をしているアレは。」

新年度・進級・編入（後書き）

魔法世界出すことにしました。

完全なる世界

東京都練馬区 三千院邸 AM・10・00

今日も今日とて学校をサボったお嬢様はついさっきまで二度寝に勤しんでいたのだが、今し方彼女の執事によって起こされ遅い朝食を食べていた。

「なあ、ハヤテ。次元航行船が完成したらなんて名前つけようかな。マゼラン、サラミス、グワジン、ムサイ、チベ、ホワイトベース、ラー・カイラム、アークエンジェル、どれがいいと思う？」

「船体の形状にもよりますけど、私見ですが、チベだけはやめた方がいいと思います。コンスコン准将が乗っていたチベ級がガンダムに呆気無くやられたのが印象に残っております。

というか、お嬢様。僕はてっきりお嬢様はジオニストかと思っていた。連邦の艦も候補に上げるとは意外です。」

「何を言うかハヤテ、私はシャアやランバ・ラルといったジオンの将兵が好きなのだ。メカ的にはどちらかと言えば連邦の方が好みだ。まあ、MAに限って言えばノイエ・ジールが至高だ。異論は認めん。」

「えー、MAはビグ・ザムじゃないですか？お嬢様。それにドズル中将のあのシーンは素晴らしかったじゃないですか。」

「ちがーう！いいかハヤテ、あの回での主役はアムロでもガンダムでもドズルでもビグ・ザムでもない！！スレッガー中尉だ！スレッガー中尉の特攻とあの“悲しいけどこれ戦争なのよね。”という

台詞、これはファースト最大の名台詞・名シーンだ！」

同時刻、麻帆良学園新キャンパス内地球魔法協会本部

二人がそんな言い争いを繰り返している一方、協会の本部では会長以下幹部たちが会議を開いていた。

「今日、副会長達に集ってもらったのは他でもない次元航行技術及び次元航行船についての重要な話が有るからだ。

昨年からの研究・開発に着手しているが、次元航行技術はすでに完成しているが船の開発は率直言って開発はかなり難航している。核融合炉を搭載した船（魔法技術によって炉を密閉、船体には魔法技術と科学の融合で作りに出された超高性能合金を使用）は作れることは作れるがコストが掛り過ぎるようだ。

原因は主に魔法関連技術が不足しているからだ。

現場からの報告では魔法技術の基礎研究から初めているからかなりの時間が掛かるようだ。だが、この状況を打開する起死回生の手がある。この計画書を見たまえ。副会長。」

そう言ってロイドが渡した書類にはこう書かれていた。“ビンソン計画”（これはナギの要望で付けられた計画名である。）

「次元航行船の建造のための魔法技術を魔法世界から手に入れる。」

「一ついいかの？魔法世界とは、なんじゃ？」

「その名のとおり魔法が普通に存在している世界だ。その正体は異次元の火星が超膨大な魔力によって人工の異界と化したもので、魔法世界に存在する全てのものが魔法で生み出された幻想で成り立っている。

しかし、長い年月が経つにつれ、幻想を維持する為の魔力が枯渇を始めており、近い将来に幻想が消え、魔法世界は消滅するとされている。

はるか昔からウェールズの魔法使い達の中で私の一族だけが彼の世界との交流があった。今も昔もその存在を知っているのは私の一族だけだ。

次元航行技術がこれほど早く完成できたのも、私の一族に伝わる魔法世界へ行くための術が記されている禁書を参考にしたからだ。」

「なるほど、魔法技術が不足しているのに係わらず、これ程まで早く次元航行技術が完成できたのはそういう事であったのか。

しかし、ロイド殿。いくら一族の秘密とはいえこれ程までに重要なことはもっと早く副会長である儂の耳には入れて欲しかったぞ。」

「それについては済まないと思っている近衛殿。」

すまないと言って頭を下げたロイドは話を続ける。

「魔法世界には主に2つの勢力に分かれている。

中世に、私たちの一族の祖先の一部とそれに隷属する者たちが魔法世界に地球から移住したのだが、その子孫達が建国した「メガロメセンブリア」を盟主とする「北の連合（メセンブリーナ連合）」と、先住の獣人ら古き民が建国した「南の帝国（ヘラス帝国）」だ。

その連合と帝国は今戦争状態にある。

その原因は秘密結社“完全なる世界”、彼らが2つの国の対立を煽っているのだ。

そして、私たちの一族は、地球の者も魔法世界の者も完全なる世界のメンバーだ。

彼らの真の目的を我々は知っているからだ。

さっきも言ったが、魔法世界は魔力の枯渇により消滅する運命にある。

彼らは魔法世界に引導を渡そうとしているのだ。

戦争で両国の戦力を疲弊させた後、超弩級大規模魔法によって世界を終わらせ、消滅した者たちには永遠の理想の世界を見せ続ける。」

「それが今回の件とどう関係があるのですか？」

今まで黙って話を聞いていた詠春が険しい顔をして尋ねる。

「我々が魔法世界の魔力枯渇問題を解決し、その報酬として魔法技術を完全なる世界から提供してもらうのだ。」

ロイドが答える。

「一体どうやって！第一我々には魔法技術が不足しているというのに世界を維持するだけの魔力をどのように確保するのですか？」

詠春が興奮した様子で（おそらく完全なる世界についての捉え方がロイド達とは異なるからであろう）また尋ねる。

「我々の力では無理です。ロストログアを利用するのです。」

詠春の問いにロイドではなくクルトが答える。

「ジュエルシード。5月の事件で問題となったロストログアです。その正体は21個の膨大な魔力の結晶体です。密偵からの情報や盗聴した五月の事件の関係者の会話によると、ジュエルシードは全て合わされば複数の世界を消滅させられるほどの魔力を秘めており、現在管理局にて封印されています。」

ジュエルシードはそれほどの魔力を秘めているからして、たかが一つと惑星の環境とそこに住む生命の維持には充分であると踏んできます。

計算では21個のジュエルシード全てがあれば、人口の増加を加味しても10の38乗年は環境と生命を維持できると出ています。」

「私としては今すぐにでも完全なる世界との交渉を開始したい。副会長よろしいか？」

「どうやってジュエルシードを手に入れるつもりじゃ？」

「我々や魔法世界の存在を知られる訳にはいきません。」

それに、正直に話したとしても連中が魔法世界にジュエルシードを供与するとは思えない。

奴らにも我々の存在が知られば、管理世界に指定されそれを受け入れるか否かで世界は割れるて紛争に突入、両陣営が疲弊したところで管理局が進駐、そして我々も管理局の為に働かされるのが関の山でしょう。」

「つまり、強奪するということじゃな？」

「そういう事にそうなります。」

「………よかろう。」

「なっ、副会長！」

「仕方あるまい。詠春お主とて頭では分かっておるじゃろう。割り切るのじゃ。」

「……分かりました。」

ジュエルシード奪取作戦1（前書き）

これからは土日を中心に更新していきます。

受験あるんでちよつと更新が疎かになることもあるかもしれませんが完結させるので見捨てないでください。あと、処女作なんで色々目を瞑ってくださいね。

ジュエルシード奪取作戦1

第一管理世界 ミッドチルダ 旧市街地 pm..9..00

ミッドチルダ旧市街地のとある廃ビルの一室の床に突然魔方陣が浮かび上がり眩い蒼色の光を放つ。その光が収まった時、魔方陣の中心があった場所には数人の人影があった。

そう、たった今ジュエルシード奪取部隊が地球から転移してきたのだ。そのメンバーはフェイト・アーウェルンクス、ナギ・スプリングフィールド、アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクトの4人であった。

元々今回の作戦は協会側だけで行う筈であったが、完全なる世界側が予想以上にこの計画に食い付き、作戦の成功率を上げるためアーウェルンクスも参加する運びとなった。

アーウェルンクスを中心に全員が集まる。

「じゃあ、作戦を確認するよ。僕が市街地で広域殲滅魔法を使用して、君達は港湾施設及び空港施設破壊して管理局の注意を引きつける。

各自pm..10..00までに離脱し、再度ここに集合、管理局本部に侵入しジュエルシードの保管場所のデータと管理局の機密情報と管理局が持つ魔法技術のデータを手に入れる。

尚、できるだけ民間人には死者を出さないように。でもね、これは努力目標だから。あと君達はちゃんと変装すること。いいね？」

「「了解。」」

「それじゃあ作戦を開始する。」

アーウェルンクスがそう言い終わるや否や全員が一斉に転移魔法でその場から消えた。

ミッドチルダ市街地上空

市街地中央の上空に転移したアーウェルンクスはその眼下に広がる光景を眺めた。

歩行者信号が青になりスクランブル交差点には人が溢れている。
またその交差点から2ブロック離れた所には、ミッドチルダを走る
鉄道のターミナル駅であるクラナガン駅からは絶えず人が飲み込まれ、吐き出されている。

そして、アーウェルンクスは呪文を唱え始める。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 小さき王、八つ
足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで
射よ。石化の邪眼！」

魔法が発動しアーウェルンクスの指先石化の光線が放たれる。

アーウェルンクスは人が多い通りから順に光線をなぞるように照射していく。

最終的にアーウェルンクスの半径数キロにいた人間は、人々は異変に気づいて逃げ出す前にその殆どが石化してしまった。

（広域殲滅魔法程じゃないけど、結構な魔力を込めて術を発動したし、転移した時からわざと体から魔力も漏らしている。そろそろ管理局の部隊が来てもいい頃だ。）

アーウェルンクスがそう思案していると、ヘリ部隊がこちらに向かってくるのと陸上の魔道士部隊を乗せたと思われる装甲車両がこちらに向かってくるのも確認できた。

陸上部隊の車両の方はパニックになって逃げ惑う人々の流れに邪魔されてなかなかこちらに進むのに苦労しているようだ。

アーウェルンクスから1キロ手前辺りでヘリから空戦魔道士部隊が出撃し始めた。

（わざわざ待ってやる義理もないね）

空戦魔道士部隊が出撃中のため空中でホバリングしているヘリ部隊にアーウェルンクスは狙いを定める。スはヘリ部隊の上空30メートルに転移したアーウェルンクスは呪文を唱え始める。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト おお 地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。冥府の石柱！」

アーウェルンクスの真上を中心に半径20メートル高さ100メートルの円柱形の石柱が横倒しの状態で4本現れる。アーウェルンクスが腕を振り下ろすと石柱は自由落下運動を始め、4つの編隊を組んでホバリングしているヘリ部隊にそれぞれ一本ずつ降り注ぐ。石柱は殆どのヘリを巻き込み地上に落下していく。地面に叩きつけ

られ、石柱との間にサンドイッチにされたヘリは爆発を起こし、ほとんど鉄板のような形状になる。中の乗員は恐らく人の形を留めていたいだろう。

ヘリから出撃できた空戦魔道士部隊はおよそ半分、壊滅状態だ。

それでも、既に出撃した空戦魔道士部隊が果敢にもアーウェルンクスに攻撃を仕掛けてきた。

無数の魔力弾がアーウェルンクスに襲いかかる。

アーウェルンクスはそれを紙一重で避けるが、一部の魔力弾は起動を修正して再びアーウェルンクスに向かって来る。

（なるほど、こちらの魔法でいうと“魔法の射手”の様なものか。術者によっては追尾機能も付与することができるのか。）

追尾してきた魔力弾を障壁で防ぎながらアーウェルンクスはそう考えた。

（あちら側の障壁の性能も試させてもらおう）

「氷の精霊19頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・連弾・氷の19矢』」

隊長格の魔道士に魔法の射手を無詠唱で矢を収束させて打ち込む。隊長らしき男は障壁を展開してこれを防ぎ切る。

しかし防ぎ切ったその刹那アーウェルンクスは瞬動でその男の背後に回り込んでいた。

「小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。時を奪う毒の吐息を。石の息吹！」

（なるほど、無詠唱ならそこその実力があるものには牽制用として、ある程度のレベルに達しないものは詠唱または無詠唱の魔法の射手だけでも倒せそうだ。戦闘セオリーはあまり変えなくて良さそうだな。）

そう考えたアーウェルンクスは敵の真下に移動したが、唯でさえ部隊が壊滅状態な上、残った指揮官も討ち取られて混乱していたためかそれに気づかない。（統制が取れていたとしてもアーウェルンクスの圧倒的な速さに着いて行け無かっただろうが。）

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 氷の精霊191頭。集い来たりて敵を切り裂け。魔法の射手・連弾・氷の191矢」

真下から矢をフレアーの様に満遍なく拡散していく。

しかし、誰一人としてそれを避けることは出来なかった。全員が氷の矢によって体を下から上へ貫かれ絶命した。

ヘリから出撃して隊列を整えたり、散開する間もなく戦闘に突入、拳句指揮官を失った部隊など烏合の衆以外の何者でもなかったのだ。

アーウェルンクスは再び市街地中心の上空に移動し呪文を唱え始める。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト 契約に従い、我に従え、炎の覇王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとぼしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に 燃える天空！」

熱線を放ち、大気中に超高熱の大爆発を起こす広範囲梵焼殲滅魔法である。市街地中心から数キロが炎に包まれる。Bー52によるナパーム弾の絨毯爆撃のようである。

建物が車が街路樹が街灯が燃えていく。陸士部隊の車両も燃えているのが確認できた。しかし、人の悲鳴はあまり聞こえない。そう、人々の大半が石化しているからだ。まあ、石化していない人間がいたとしても熱線で声を上げる間もなく灼かれるだけだろうが。

アーウエルンクスが市民に対して使った「石化の邪眼」は永久石化ではない、あくまで一過性のものであり数時間すれば石化が解除されるようになっていくのだ。

「聞いているかい？時空管理局の諸君。君達の守るべきミッドチルダ市民は、今燃え盛る業火の中で石化している。だが、この石化は数時間すれば解除される。市民が生きたまま灼かれるのが見たくなかったらさっさと消火するんだね。」

そう比較的形を保っているヘリの残骸から引っ張り出した無線で呼びかけアーウエルンクスは転移した。

ジュエルシード奪取作戦2（前書き）

自分としてはアンチやってるつもりはそんなにないという。

ジュエルシード奪取作戦2

9..48PM 旧市街地

市街地から離脱したアーウェルックスは同じく港湾施設及び船舶の破壊工作を終えたナギたちと合流していた。

「首尾はどうだい？」

「ああ、特に問題はねえ。まあ、少し暴れたりなかったが。」

「鎧袖一触って感じじゃな。魔道士といったかこちらの魔法使いは？少し脆すぎるの精神的にも実力的にも。」

非殺傷設定に慣れているせいか、血を見ただけで狼狽して隙だらけじゃったわ。

後から増援に來た者たちは少しはやるようだったかの。」

「港湾のインフラはナギの雷の暴風や千の雷といった大火力の魔法で、船舶は私の重力魔法でだいたい沈めました。復旧にはかなり時間がかかるでしょう。」

「わかった。それじゃあ地上本部に行くでしょう。」

管理曲自体慢性的な人手不足だが地上部隊は次元航行部隊通称海より遙かにそれがひどい。

それに加えて今は救助活動に忙しいだろう。

また、地上と海は結構仲が悪いから連携して動くことはないだろうから、管理局のトップが状況把握をする前に肩はつくだろう。」

地上本部 中央制御室

ここではほんの数分前まで市街地で発生している大火災の消火活動・民間人の救助活動に当たる地上部隊の指揮が取られていた。

しかし、今現在、現場からの報告や指示の要請に応答するものは誰もいない。

オペレーターも指揮官も全てが石化しているのだ。

「しかし、あなたすごいですね。あの巨大な結界を抜くなんて。」

地上本部のあるビル群には巨大な結界が広域にわたって展開されている。

アーウェルックスはそれを破壊するのではなく、一時的、部分的に無力化して侵入したのだ。

「そうかい？ メガロや帝国での工作活動した時にも今回みたいなことを何度もしていたけど。」

それに、こっちの連中も、結界に頼り切っているというか、過信しすぎているようで中の警備がザルなのはメガロや帝国と変わらないね。」

アーウェルックスがキーボードを叩きながらアルにそう告げた。

「よし、この施設のコンピュータの掌握は完了したよ。」

ジュエルシードの保管場所は……見つけた。

保管場所はこの施設の地下7階の古代遺物保管庫。

ここから保管庫までのルート上、及び保管庫のセキュリティを解除。

ルート上以外の施設内の隔壁閉鎖。

結界は出入口ゲートも含めて全体に再展開。

これで暫く外からは誰も来れないね。

あと機密データと魔法データの吸出しも後340秒で完了するよ。

」

「よし、じゃあ俺とアルとお師匠とでそのジュエルなたを取ってくるぞ。お前はここで施設のセキュリティを維持し続けてくれ。」

「ああ分かった、封印状態で保管されているが、魔力を流し込むと暴走するから気を付けてね。」

一方その頃市街地の火災現場では

side モブ現場指揮官

「本部応答願います！本部！・・・・・・・・・畜生！！」

一向に応答のない無線を地面に叩きつける。

火災の消火活動に向かった方がいいが、救助活動開始そうそう本部か

らの連絡が途絶した。

二次被害による救助部隊の増援の要請、救助者を病院まで搬送する車両の増援要請、搬送する病院の指示要請、各部隊との連携を取るための指示要請、これらすべての要請に対して本部からの応答がない。

部隊間、病院などの施設との連絡システムはすべて本部を介して行われるため、組織だった救助活動がまるでできないでいた。

本来迅速な治療が行われれば助かるはずの患者がも、病院に搬送できないために死んでいく。

その光景を見て指揮官はやり場のない怒りに襲われる。

「一体どうなってるんだ畜生！畜生！畜生！！畜生オオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

それから数十分後、アーウェルンクス達はジュエルシードとデータを確保して離脱。

地球へと帰還した。証拠隠滅、後の捜査攪乱のため中央制御室から本部内のすべての端末を初期化した後コンピュータ等の電子機器類は全て破壊された。

これによって、わずかに彼らを捉えていた監視カメラの映像や計器に検出された彼らの魔力の形跡のデータは失われた。

今後の話し合い 1

作戦を終え、管理局に逆探されないように転移を繰り返して一行はようやく地球にたどり着いた。

麻帆良学園大学 新キャンパス内魔法協会本部

本部の会長室で四人の男が終始無言で部隊の帰還を今や遅しと待っていた。

今回の作戦は管理局側に自分たちの正体がバレてしまうと戦争に発展しかねない。

したがって、極力正体を掴まれる危険性を排除するために作戦途中の状況報告などは一切行っていなかった。

部隊は地球に到着した段階でも念話や無線で連絡をしないことになっていた。

そこにジュエルシード奪取部隊の面々がやってきた。

そして開口一番アーウェルリンクスがこう言った。

「作戦は完全に成功したよ。間違いなく足もつかない。報告書は明日までに提出しておくから。」

四人は一斉に安堵の表情を浮かべる。

「ご苦労。これで艦隊創設の目処がついた。」

「それでは早速今後の話をしましょう。先の密約通り、今後我々は魔法世界には基本的に不干渉、もし接触したい場合は必ずそちらを紹介するか、承諾を求める。

今後貴方がたは我々に魔法技術の供与及び我々の戦力増強に協力する。でよろしいですね。」

「ああ、一向に構わないよ。それと、今後そちらの対管理局作戦に場合によっては参加してあげるよ。貴方がたの存在がバレれば魔法世界もいずれバレる可能性が高くなる。

僕らとしては、貴方がたには管理局に対抗しうる戦力を整えるまで、いや整ったとしても、できるだけ静かにしていて欲しい。

貴方達にとっても剣を取るのは最後の最後でいいでしょう。

今貴方達がすべきは、最後の最後に使うための剣を作ること。今回の作戦もその一環でしょう。」

「ああ、そうだな。私としてもだいたい同じ考えだ。

全面戦争などしたくはない。だが、戦力が整い次第、表舞台に出て管理局に対して発言ぐらいはしていきたいと思っているのだが。地球のことは我々に任せてもらおうとな。

地球は管理局からしたら管理外世界であるし、奴らは慢性的な人手不足であるからうまく立ち回れば、良い条件を引き出すこともできると考えている。」

「私も会長とだいたい同じですね。管理局を打倒したくて我々は活動しているわけではありません。

向こうが此方に気が付いていない平時の今でさえ我々が全力で艦隊建造に取り組んでも彼我の戦力比を覆すことはできないでしょう。

況や我々ができるかぎりの戦力を整えて開戦して善戦したとしても向こうが戦時体制となれば管理局の物量には絶対に勝てない。

第二次世界大戦における日本と米国のようなものです。奇襲や不意

打ちで向こうの艦隊に大打撃を与えられてもすぐに再建されるでしょう。

とにかくヒト・モノ・カネ・生産力すべての面で差がありすぎる。相手は複数世界にまたがる官立の大組織、我々は民間から支援を受けている一組織にすぎません。

しかし、これは全面戦争となればの話です。

我々がある程度の戦力を保有して、管理局との協調姿勢を見せれば、向こうが強硬姿勢を取ることも戦争となるまで関係が悪化することもないと考えています。

我々の目標は、管理局にとって戦力では優っているがいざ戦えば自分たちの被害も相当なものになるというふうにみなされるまでの戦力を保有した上で上手く立ち回り此方の要求を飲ませることです。」

管理局は多くの管理世界を抱えています。そしてその維持のための戦力はむしろ少ないぐらいだ。我々に勝利してもその犠牲のために管理世界の維持が一層困難になるり、犯罪者が跋扈することになる。そう認識させればいいのです。必要と有らばそう認識させるための工作も。あちらもたかが管理外世界一つのために管理世界全体を不安定化させる訳にわいかないでしょう。とクルトは付け足した。

「そうかい。まあ、旧世界と新世界は一蓮托生みたいな所がある。君達が余程の無茶をやらかさない限りは協力を惜しまないよ。」

今後の話し合い2（前書き）

何か感想欄で勘違いしている方がいらっしやいます。協会のは子ども達を第一に考えているわけではありませんよ。自分達や地球世界の自存・独立・自決の維持が第一の目的です。自分達がアイデンティファイしているものを維持したい、守りたい、余所者に手出しされたくないということです。

悪く言えば、右翼、排他的、エゴということになるのでしょうかね？

今後の話し合い2

アーウェルンクス、ナギ、アル、ゼクトが退出した後、会長を始めとする幹部たちはスポンサーであるナギを加えて再び会議を開くことになった。

「で艦隊建造はどうなっているのだ？あと言っておくがネーミングライツは私にあるからな。」

ナギの質問にクルトが答える。

「ビンソン計画の第一段階である今回の作戦が成功したので、技術獲得の目処が立ちましたし、三千院様の援助のおかげで資金の面も問題はありません。今後速やかに建造に着手する予定です。」

「艦艇の設計はどうなっているのだ？」

「内部の機関や動力部、兵装の設計はほとんど完了しておりますが、艦全体の設計はまだです。」

「そうか。おいハヤテアレを出せ。」

ナギの命を受けてハヤテが3つの艦艇の模型を出す。2つはファーストガンダムに地球連合軍艦艇として登場するサラミス級巡洋艦とマゼラン級戦艦、最後の1つはガンダムSEEDに地球連合軍艦艇として登場するアークエンジェル級強襲機動特装艦であった。

「どうだなかなかカッコイイデザインだろ。もとはアニメの物だが実用性やスペックについては此方で検証してある。」

最も今回確保された技術がなければ建造できない代物に仕上がっているがな。

詳しくは資料を読め。それと、」

ナギが目で合図してハヤテがクルトに資料を渡し、もう一個の模型と複数の計画書を出す。

「これらの計画の方も進めておいてくれ。今回の技術獲得で工業技術の水準も底上げ出来るだろうから十分可能だろう。援助の規模が拡大しておくから安心しろ。」

計画書を読んだクルトは感嘆の声を漏らす。

「素晴らしいです三千院様。

スポンサーの立場知りうる情報だけでここまで現状を把握しておられるとは恐れ入りました。

この計画を一番理解されているのは三千院様自信ですから是非協会の戦略委員会にはいつてこの計画を推進していただきたいです。

戦略委員会に入っていたければ、今後の戦略立案のため今まで以上に管理局に関する情報を知ることができます。」

「いいだろう。もともとスポンサーという立場を最大限に利用して介入していくつもりだったからな。」

今、ナギはシロッコやハマーンのような気持ちだった。

ナギは現状の政治に不満を持っていた。

財閥のトップとして世界中に根をおろした多国籍企業を何社も運営しているナギはそこらの政治家（特に日本）より世界の現状や趨勢というものを把握できていると自負していた。

しかし、ナギは政治家になる気も無かったし、なれるとも思ってい

なかった。

政治家になるには、政治・経済に関する明晰な頭脳だけでなく、大衆に受けることが必要なのだ。

しかしプライドの高いナギは其れをよしとしなかった。

選挙に当選するために自分が出した正論を曲げて、大衆受けのいい政策を打ち出して媚びるようなことは嫌だったのである。

それに、万が一当選したとしても自分の政策を実行できる立場、つまり首相になるには何十年かかるか分からない。指導者の立場になるには、何度も大衆に媚びを売り続け当選回数を重ねながら、党での立場を上げていき党内の俗物共をコントロールしなければならぬ。

指導する立場になっても内閣は国会に依存しているから自分の党の利害を反映しなければならない。ナギはこれは仮に自分が新党を作って政権をとっても同じ事だと思っていた。

そもそも、自分の能力は大衆や党から評価されることは難しいとと考えていた。

有能であっても其れを評価できるほどの知識階級は大衆の中には少ないし、党でも人の能力の評価に当選回数や利害関係や女があうだこうだとカビの生えたような古い考えを持ち込んでくる輩も未だにいる。自分にはカリスマはない、政治・経済に関する能力の自信はあっても国民意識を変えるような、啓蒙活動の様なものはできない。というか、それ以前に自分はまだ13歳で最低でも後12年はかかる、指導者の立場になる頃には50を超えているじゃないだろうか。“あーあーあーもどかしい。”いつもそんな事を考えていた。

だが今のナギは違っていた。自分の能力をある一定の目標に向かって遺憾なく発揮できる場所を見つけたナギは使命感、達成感、満足感を感じていた。自分に陶醉している面もなきにしもあらずであった。

それから会議は滞り無く進行していった。

・
・
・
・
・

今部屋にいるのは近衛翁、クルト、ロイドの3人だけであった。

「クルト君。先ほど君が言っておった工作とはどのようなものじゃ？」

「ああ、管理局に我々に勝利するために戦力を割き犠牲を払っている場合ではないと認識させるための工作の事ですか？」

「うむ。そうじゃ。」

「簡潔に言うと、管理世界の社会不安・治安の悪化を煽るのです。具体的には、アーカードを管理世界の地上部隊の管轄地域で暴れ回らせるのです。」

もちろん、我々の差し金であるとは分らないようにしてです。そうですね、現地のテロリストに扮するなんてどうでしょう。

アーカードを陸の管轄で暴れ回らせ、只さえ悪化気味の治安が悪化させれば、現状の海と陸との大規模な戦力偏在が問題になる筈です。そして、海の戦力・予算は削られ陸に回される。

結果的に管理世界での活動規模を縮小せざるえない。況や管理外界に於いてをや。

それに、市民の多くは地上に住んでいますから地上の治安が悪化すれば絶対に陸の戦力強化を求める世論が形成される筈です。」

「そうか……。そうすれば確かに我々にとって有利な状況を作り

出すことができるの。

管理局の陸の現状からすれば、テロの発生や治安悪化も不思議ではない。連中も後々そう思うだろう。だがしかし・・・」

ロイドが近衛の言葉を遮って発言する。

「君の言はんとしていることも判るし、理解もできる。

だが我々は、我々や地球世界にとって利となることを第一に考えるべきだ。

これを実行すれば間違いなく、我々や地球世界の自存・独立につながる。

これを実行すれば、我々にとって良い管理局との関係が構築できる。そのために奴らの世界の民間人や管理局員が何人犠牲になろうが知った事では無い。」

「まあ私だって、我々の自存の可能性を上げる為にミッドチルに小惑星を落とそうとかいう作戦ならやりすぎだと思いますよ。

それに、むこの民を犠牲にするは痛ましい事です、テロで死ぬ人数なんて高が知れているではありませんか。

それで、我々や地球世界の自存・独立・自決を保つことができ、ひいては、管理局との対立や戦争を避ける事に繋がるのであれば安いものではありませんか。」

「そういうことだ。

英国はWW2の時はアカ、クレムリンの化け物共とも手を組んだ。私も悪魔とだって手を組んでやるさ。」

因みにこの時ロイドが言った悪魔とはアーカードの事では無い。

利益の為に異世界の市民を犠牲にすることすら厭わない自分の冷酷非情な心の一面の事である。

「儂も賛成じゃよ。ただ歳を取って丸くなったせいか、割り切って飲み込むのに少し時間がかかっただけじゃ」

そう言い残して近衛は部屋から出ていった。

今後の話し合い2（後書き）

ナギの描写は字数稼ぎと面が大きいです。いつも15000字ぐらいで止まっちゃうからね。

八神はやてとの接触1（前書き）

本のタイトルはなんとなくです。

間違えて感想一件削除してしまいました。申し訳ありません。

八神はやてとの接触1

八神はやては、不幸という部類に間違いなく入る少女である。幼くして両親を亡くし、下半身は原因不明の麻痺状態であり、車椅子での生活を余儀なくされている。学校にも通えず同世代の友人もいない。

しかし、父の古い友人であるギル・グレアムという男性からの援助もあり、経済的には何不自由ない生活を送れているし、主治医の石田先生のように、自分の事を気にかけてくれる人もいる。大体、自分以上に不幸な人間など世の中には腐るほどいる。衣食住に事欠かないだけでも、それは地球規模で見れば大変恵まれていることである。

普通の9歳の少女ならば、その不幸を盛大に嘆いていただろう。しかし、彼女はそうしなかった。

聡い彼女はそのような行為に意味はなく、騒いだところで何一つ解決などしないということを分かっていた。彼女は現状の不満を言う事なく寂しさを感じながらも、日常生活をそれなりに楽しむ生活を送っていた。

風芽丘図書館。

ここは、読書家である彼女のお気に入り場所である。彼女は週に3、4回この場所に足しげく通っている。

自宅から図書館へ向かう途中、自分と同じぐらいの年齢の数人の少女、時間からして下校中であろう、が目に入った。

制服からしておそらくは近所にある聖祥の小学生達だろうと思う。それを羨望の混じった瞳で眺める。

しかし、“羨んだ所でどうにもならない” そう考えたはやては、

止めた車椅子を再び動かした。

それからは、やるせない気持ちを紛らわすためか、若干車椅子のペーイスは無意識の内に上がっていた。

気がついてそれもそれを修正する気にはなれなかったのですぐに図書館についた。

はやては適当に本を探し始める。

興味を惹くタイトルの本がすぐに見つかった。

それを本棚からとって膝にキープしながらまた興味が引かれる本を探す。彼女はいつも三冊取ったら読書コーナーに移動して読んでいた。習慣というやつだ。既に彼女の膝には2冊の本があった。

それからすぐにもう一冊の本は見つかったが、その本が置かれている場所を見て彼女は困った顔になった。残念な事に車椅子に座っているはやてには届きそうにない高さにあるのだ。

むう、と唸り、手をあげる。

だが、やはり目的の本までは届きそうにない。

それなら、とはやては本棚の縁を両手で掴み車椅子から立ち上がる。届いた！

その時、本棚をつかんでいた左手が滑った。

右上にあったその本を掴むために、体勢が傾いていたのでストッパーを掛けてある車椅子がある後ろではなく横に体が倒れていく。

しまっー

このままいけば床に盛大に体を強打する。

直後に来るであろう衝撃を思い、はやては思わず目を瞑った。しかし、いつまで経っても衝撃が来ない。不思議に思ったはやては恐る恐る、ゆっくりと目を開く。

「……あの、大丈夫ですか？」

赤毛の少年が自分を受けて止めていた。

「ふえ？」（外国の人？）

困惑しつつ、冷静になって自分の状況を確認する。次第に落ち着いてきたはやては、感謝を口にした。

「あ、ありがとうな。お陰で助かったで」

「い、いえ。どういたしまして。」

赤毛の少年は照れながら返す。

「あ、あの、本を取ろうとしていたんですね？ 僕が取りますよ。どの本ですか？」

はやては何とか目的の本に届きこそしたが、結局倒れかけたため、掴み損ねていた。

「あの一番右はじの本や。“グローバリズムという妄想”ってやつや。」

少年はその本を手に取りはやてに渡した後に言ってきた。

「その、すごく難しい本を読むんですね。」

少年の視線は膝の上にキープされた本のタイトルにも及んでいた。

“「近代の超克」とは何だったのか？”

“大人も子どももわかるイスラム世界の「大疑問」”

「んなことあらへんよ。全部新書の文庫本や。わかりやすく噛み砕かれてるで。」

そんなやり取りの後、お互いに自己紹介をしあった。

「僕は、ネギ・スプリングフィールドです。」

「私は八神はやて。 ひらがな3つではやてや。変な名前やろ？」

「そんな事ないですよ。漢字は中国由来なんでしょう？」

ひらがなって日本らしさがあっていいと思いますよ。

名前も顔も日本らしくて素敵だと思いますよ。」

ネギは純粹に真面目な顔をして、最後の部分は微笑みながらそう言い切った。

ネギは実に実直で礼儀正しい紳士である。

「あ、ありがとな・・・。」

真顔で、恥ずかしげもなく褒めてくるイギリス紳士に赤面するはやてであった。

・
・

・
・
それから、ネギのフォローにはやてがお礼を言ったり、ネギの日本語を褒めたり、はやての身の上をネギが言わせてしまつてそれを物凄く謝り、はやてがそれを気にしないでいいと言つて宥めたりした。

「へえー、ネギ君はイギリスから来たん？」

「ええ、イギリスのウェールズ地方の方からきました。
暫く、日本に住むことになって今は聖翔という学校に・・・」

ネギの出身地がイギリスだと知り、はやての顔が綻ぶ。
イギリスは、彼女の後継人が住む地でもある。

「さっき言った、グレアムおじさんもイギリスの人なんよ。」

「それは奇遇ですね。」

「あの、八神さん。」

ネギが真剣な顔をして話題を変えてきた。

「なんや、ネギ君。それとはやてでええで。」

ネギはずっと八神さんと呼んでいたが、暫くネギと話をして打ち解けた彼女はそういった。

八神はやてとの接触2（若干修正とお知らせ）（前書き）

推敲しました。

これから受験に集中するのでかなりペース落ちます。

来年3月まで更新が数回有るかどうか、もしかしたら無いかもしれない
ません。

でも受験終わったら必ず再開するのでどうぞご心配なく。

だから、お気に入りから抹消しないでください！お願いします。

八神はやてとの接触2（若干修正とお知らせ）

「なんや、ネギ君。それとはやてでええで。」

「はやてさん、さっきの事改めてごめんなさい！」

思いつきり頭を下げるネギ。

そしてゆっくり頭上げて

「それで、その・・・僕とお友達になりませんか？はやてさん。」

「僕には、はやてさんが、とてもつらそうに見えました。

僕がどれ位はやてさんの力になれるかわからないけど、でもきつと今よりは楽しくなれると思います。

友達がいれば今より寂しい思いをすることは少ないと思います！」

先程ネギがハヤテの身の上を言わせてしまった時、はやては自分を語る際その年に似合わず諦念気味に、天涯孤独なのは運命でそれを諦めて受け入れるような感じを匂わせて話すものだからネギは、はやてを必死に説得するように語気を若干強めて一生懸命な顔ではやてに言った。

ネギもウェールズにいた時こそ友達もほとんどいなかったが、海鳴に来てからはこのかや利那や、なのは達と友達になった。それもあつてもともと、前向きな性格が更に前向きになった感じだ。

「僕の友達とも友達になったらいいと思います。みんないい人だから大丈夫です！」

だから、その・・・、そんな悲しい諦めた顔しないでください！」

思いの丈を一気に吐き出し終え、少し落ち着いたネギは自分で言ったことを反芻して、次第に出すぎたことを言ったのではないかという思いに駆られる。

はやても何も言わずにポカンとして表情を浮かべている。

余計なお世話と思われるいるんだらうとネギは思う。

「あ、あ・・・、そ・・・の、スイマセン！！　いきなりこんな、・・・人の心に、踏み込むような、その、勝手に分かったような口をきいてしまつて、その、その・・・」

顔を赤くしてあたふたするネギ。

「ネギ君。」

はやては微笑しながらネギの口元に人差し指をスツとおいて黙らせる。

「気にせんでええよ、ネギ君。ちよつとびっくりしただけや。

私、ネギ君が友達にならないかって言ってくれてとっても嬉しかった。ビックリして声も出せんようになるぐらいな。せやから、」

はやては一呼吸おいて

「友だちになろうな、ネギ君！」

・
・
・
・
・

それから、ネギとはやては又図書館で合う約束と今度ネギの友達に

合う約束もした。

三千院からのこれまでの協会への支援はこれから出す予定の次元航行船の建造費を含めると数兆円に上るが、それらはナギの個人資産8兆円のうちから全て出されている。

しかし、ナギは善意だけで資金援助しているわけではない。

支援に際して、魔法自体は秘匿するが魔法技術や魔法技術で発展した科学技術やその産物、敵から鹵獲した技術で敵に悟られない程度の技術は三千院財閥で利用していいという条件を飲ませたのだ。

今三千院家を取り組んでいるのは、商用核融合発電、衛星軌道上での太陽光発電、新技術を用いた宇宙開発研究（軌道エレベーター、マストライバーなど）、またこれらを実現するための新素材の開発、既存の素材の安価な製造方法の開発などだ。

核融合発電でより安価な電力供給が可能になり安価な高性能バッテリー開発できれば、現状の化石燃料による発電・輸送に対してより優位に立つことも可能である。

まあ、世界規模でのエネルギーの切り替えには長い時間がかかるだろうが、早めに石油に変わるエネルギー分野に進出しておけば三千院グループの将来は安泰だろう。

これは日本にとってもいいことだろう、エネルギーを外国に依存するより自給できる方が望ましいとナギは考えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9317u/>

魔法少女リリカルなのは～地球の魔法使い対時空管理局～

2011年10月9日01時44分発行